

## 2023 年度口語詩句賞総評 杉本真維子

昨年の感想と大きくは変わりませんが、やはり一日の投稿数に制限が設けられてから作品のレベルが一気に上がったことをつくづく実感します。それは投稿者ご自身が自作を選別する力を養うからであり、そのこと以上に批評眼を鍛える方法はないように思います。当然どれを投稿しようか迷うでしょうし、選者に一番よい作品を選んでもらいたいという気持ちもよくわかりますが、引き続き、がんばって、ご自身で、これ！と思える自信作を選びぬいてください。

新人賞の吉沢美香さんの作品には、手元の小さな日常から一気に神へとつながる魅力的な飛躍があります。その昇華の道筋を言葉で残してくれているところもいいです。ポエジーの跡を見せてもらったようで息をのみます。「蛇口には星の通った跡紫陽花」「雨漏りの溜まる花瓶／／神の旅」など。

優秀賞の奎いう子さんは、毎回、自由な書法であつといわせます。「蚕ふしふしふしと不死嚙み砕く」「晩冬の螺旋ばかりの試し書き」など。

奨励賞の長谷川柊香さんは、カメラの露出を目一杯ひらいたような明るい世界が印象的です。その奇妙な明るさに歴史が絡めとられています。「コンビニは常に明るい敗戦日」「雪のこえ開いたままの解剖図」など。

奨励賞のこはくいろさんは、作品に芯のようなものが出てきて、頼もしいですね。ますます面白くなりそうです。「夕立を私のなかに隠しもつ／いつか名を呼ぶ我が子のために」など。夕立という言葉が性や出産の烈しさを示唆するものになりうるというのは発見でした。

大嶋碧月さんの作品は、ちょっと過激な表現のほうに目がいくかもしれませんが、その詩は優れた認識を伴っていて、実力派のにおいがします。これからが楽しみです。「翌日に刺す通り魔が今日に逃げ／今日とは今日である他はない」など。「君が美しく叫ぶための世界が／永久に糞っ垂れでありますように」も「糞っ垂れ」の導入の仕方に不思議なセンスが感じられます。

中矢温さんはのびのびとした制限のない描写が気持ちよいです。

投稿は長丁場ですが、来年も一緒にがんばりましょう。みなさんの作品にいつも刺激をもらっています。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございます。